



TITLE:

トマス・アキナスの無抑制
(incontinentia)論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

松根, 伸治

CITATION:

松根, 伸治. トマス・アキナスの無抑制(incontinentia)論. 京都大学,
2002, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2002-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/149610>

RIGHT:

氏名	まつねしんじ 松根伸治
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第198号
学位授与の日付	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科西洋哲学史専攻
学位論文題目	トマス・アクィナスの無抑制(incontinentia)論

(主査)
論文調査委員 助教授 川添信介 教授 内山勝利 助教授 水谷雅彦

論文内容の要旨

本論文はトマス・アクィナスにおける「無抑制」を論じる。ギリシャ語でアクラシア(akrasia)と呼ばれる現象がある。アクラシアとは、自分自身がなすべきでないとおこなってしまうとか、自分の最善の判断あるいはより善い判断に反して行為するというような事態を言う。プラトンの『プロタゴラス』が伝えるソクラテスの考えは、無抑制は無知にすぎないというものであった。これに対してアリストテレスは『ニコマコス倫理学』第7巻において、アクラシアを否定するソクラテスの考えは、私たちの日常の体験や常識に反するのではないかという疑問から出発し、詳細な議論を残した。トマス・アクィナスの無抑制(incontinentia)の議論が、この『ニコマコス倫理学』を下敷きにしていることは間違いない。アクラシアという現象に対するアリストテレスの問題意識と用語法や分析方法が、トマスの理論に決定的な影響を与えていると同時に、トマス自身にとっても無抑制は重要な問題であった。近年の研究でも問題とされていることは以下の三点である。(1)この問題に関するトマスとアリストテレスの関係はどのようなものか。(2)意志はトマスの無抑制論でどのような役割を果たしているか。(3)無抑制の議論はトマスの倫理思想全体のなかでどのような位置づけを与えられているのか、あるいは、私たちが考える意志の弱さとトマスの無抑制は同じ問題なのか。このような問題意識を論者も共有し、トマスの倫理思想全体という広い視野からこのテーマに考察を加えることが本論文の意図である。

第I章「倫理的行為における理性・意志・情念」では、トマスの無抑制論を理解するための予備的考察が行われる。確認される主要な論点は以下の通りである。(1)行為の根源あるいは規範としての位置が理性に与えられており、理性に反する行為として罪が規定されていること。(2)行為において理性と意志とが相互依存的にはたらいっている点が強調されていること。(3)罪の原因として、理性、意志、感覚的欲求(あるいは情念)の三つが挙げられ、無抑制は「弱さ infirmitas あるいは情念 passio による罪」として分類されていること。(4)だが、情念には行為を直接に引き起こす力はなく、本来的に理性や意志に従うものとされていること。トマスの説明では、理性、意志、情念という諸要素が緊密に連携しあってはたらき、ひとつの行為を成り立たせているという側面が重視されており、そのいずれにも絶対的な自己運動性や自律性は与えられていない。したがって、無抑制あるいは意志の弱さの問題は、そのような緊密な連携のどこかに何らかの齟齬や軋轢が生じている状態として説明されることになる。

第II章「実践的推論と行為」では、「実践的推論 syllogismus operativus」について、(1)実践的推論の基本構造、(2)実践的推論の結論は行為であるというトマスの主張の意味、(3)実践的推論の不確実性、の三点が論じられる。

(1)トマスがアリストテレスから学んだ実践的推論は、人間の行為を一連の推論の結果として説明しようとするものである。その基本的な構造は、大前提「〇〇をなすべし」(行動の原理・原則)+小前提「この行為は〇〇である」(具体的判断、状況把握)→結論「この行為をなすべし」→これをなす(行為)という三段論法の形である。(2)推論の結論が行為である、という一見不可解な主張は、人間がおこなう合理的な思案や判断が行為に直結していることを示そうとするものである。推論と行為の結びつき、推論のもつ行為の駆動力が強調されている。トマスの考える実践的推論は、現実に行為者のうちに生じ

る心的プロセスとして、すなわち、今ここでなされる具体的な行為を現実にも生み出す原因として考えられている。(3)実践的推論の大前提について人は誤らないという主張がなされることがある。しかし大前提の不可謬性とそれにもとづく結論の正しさは必ずしも保証されない。たとえば、推論の大前提が確実な知だと考えられる場合でも、現実の個別的行為への適用の場面では、情念の影響によって理性が妨げられて、大前提が行為に反映されないことがあるからである。

第三章「実践的推論モデルによる無抑制の説明——トマスはアリストテレスをどう読んだか」では、トマスが実践的推論という考え方を使得無抑制をどのように理解し説明しているかが具体的に検討される。『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレスの議論をトマスがどのように理解し受容しているかが重要な考察の対象である。アリストテレス理解にもとづいてトマスが考える無抑制は次のようにまとめることができる。《無抑制とは、行為の瞬間に、大前提にあたる正しい普遍的な原理は明瞭に意識されているが、小前提にあたる正しい個別的な認識が欠落しているか、あるいは意識から遠く後退している状態である。そして、この個別的認識の欠落や後退を生み出している原因は強烈な情念である》、と。より具体的に言うと、《抑制のない人も正しい基本原則を一般的にはたしかに知っている。しかし、自分のなそうとしている行為があまりにも魅力的に見え、快樂の側面だけがクローズアップされてそこに意識が集中する。そこで、快樂原理にもとづく裏の三段論法とでも呼ぶべきものが有効化する。その結果、その行為の別の側面が見えなくなってしまう。つまりそれが実は罪にあたるという判断が潜在し、埋没してしまう。こうして、この人の中では健全な大前提は宙に浮いてしまった状態になる》。このような基本的な理解を確認するとともに、『命題集註解』『ニコマコス倫理学註解』『神学大全』の三つのテキストを比較することによって、トマス独自の説明が小前提の明確な位置づけにあることが示される。実践的推論の要は小前提である。それは単なる事実判断ではなく、当人の倫理的なあり方を反映している。無抑制の説明に関してトマスの著作間に見出される変化は、アリストテレスの議論を消化し、さらに明確化あるいは徹底化しようとする過程で生じてきたものと言える。たしかに、トマスはアリストテレスにならって、抑制のない状態の人は何を知っていて何を知らないのかという点に思考を集中し、これについて明確な見解を提出している。実践的推論モデルを使得単純化して言うと、抑制を失うという状態が「実践的推論におけるしかるべき小前提（および結論）を知らないこと」として説明されている。

第四章「無抑制と放埒」で論者は、無抑制という現象の輪郭をさらに明確にするために、無抑制に似たものとされる「放埒 *intemperantia*」との違いに注目する。無抑制と放埒の違いをまとめると、(1)放埒な人がすべての快樂を追求しようとする原則だけにもとづいて行動するのに対して、抑制のない人のうちには善についての正しい判断、人生全体の目的についての健全な行動原理が保たれている。(2)放埒が永続する習慣であるのに対して、無抑制は一過性のものである。その意味で無抑制は節制という徳と放埒という悪徳の中間にある。(3)トマスは、無抑制と放埒の原因をそれぞれ感覚的欲求（あるいは情念）と意志（あるいは悪意）に振り分けることで、アリストテレスの無抑制と放埒を自分の思想体系のしかるべき場所に位置づけている。放埒を意志の腐敗、転倒ととらえることで、無抑制との明確な区別をつけようとしている。だが、トマス独自の見解として(4)「放埒が選択に従っているのに対して、無抑制は選択に反している」というアリストテレスの表現をトマスは自説に取り入れない。『神学大全』ではこれとは違う独自の説明が導入されている。「選択しながら罪を犯す *peccare eligens* / 選択によって罪を犯す *peccare ex electione*」という二分法である。無抑制は選択しながら罪を犯すこととされる。この *eligens* という語は、抑制のない人も現実にもみずから罪の行為を選び取っていて、行為の責任を負わねばならないということを一方で示唆する。それと同時に他方で、*ex electione* との対比においては、人間のもっとも内側が腐敗してしまっている放埒とは違って、無抑制は情念を原因とする一時的な状態であり、その意味では救いがあることを示す。両義性が強いこの表現は無抑制ということがら自体がはらむ分裂した性格を反映するものと言える。

第五章「意志の弱さはいかにして可能か」では、これまでの議論で不十分だった点を考え直すために、いくつかの新しい説明原理を導入して、無抑制という事態を論じるより広い文脈を見出す試みがなされる。まず、「意志の弱さ」に関して以下の論点が明確にされる。無抑制の説明全体のなかでトマスが「意志の役割を強調した」とは言い切れない。むしろ印象的なのは、一箇所に罪の原因を集中させず、様々な要因の絡まりあいとしてこの現象が説明されていることである。このことは、理性、意志、感覚的欲求（さらには内部感覚）それぞれのはたらきが有機的に連携協力しながら、ひとつの倫理的行為を形成していることを示すものでもある。このようにして、トマスが無抑制論で述べる「弱さ」は、あくまでも「魂の弱さ *infirmitas animae, infirmitas in anima*」としか言い表せないものであった。そしてわれわれはついに「意志の弱さ *weak-*

ness of the will」にあたる表現をトマスの文章に見出すことはできないのである。さらに、以下のように論点を拡張された文脈の中において論じられる。すなわち、トマスはアリストテレス解釈にもとづいて、無抑制を「実践的推論におけるしかるべき小前提（および結論）を知らないこと」ととらえている。しかし無抑制の行為を説明するためには、個別的なレベルで矛盾する判断をはっきりと抱えていることを示す必要があるのではないか、という疑問が残る。この疑問に対して論者は次のような議論と概念の同定をおこなう。まず、異質の説明原理に見える実践的推論モデル（規範—実例型）と行為論モデル（目的—手段型）を統一的にとらえる試みがなされる。次に、行為論モデルの三層「思案・決断・実行」に注目し、それぞれが欠落する場合を意志の弱さのヴァリエーションと考えることができるのではないかという予測が立てられる。これに対して徳の理論では、「思案・判断・命令」が思慮（*prudentia*）の三つのはたらきとして語られている点が着目され、これら三層に対応するそれぞれの無思慮が、先に予測した意志の弱さのヴァリエーションにあたるという同定がおこなわれる。このようにして、論者はトマスの「無抑制論」を離れて文脈を広げることによって、「徳の理論」における説明のなかにも、意志の弱さと呼べる現象の説明を見出す。人が正しい決断や選択、あるいは正しい推論の結論にいったんは到達していながら、それを次の段階へ進めて実行につなげることができない場合、つまり「より厳密な意味での意志の弱さ」が、徳論の文脈では無思慮の一形態（＝変節、怠慢）としてたしかに説明されている。ただし、これはトマスの用語ではもはや「無抑制」とは言えない。トマスが無抑制と呼ぶ状態や行為の範囲は、私たちが意志の弱さとみなす状態や行為の範囲よりも狭いと考えてよい。しかし上で見たことが正しいければ、思慮に反する悪徳や罪という視点から、道徳的弱さを考え直してみることがたしかにできるのである。

最後に「結論と展望」では、「序論」で述べた三つの問題それぞれについて結論が述べられる。(1)ソクラテス・アリストテレス・トマス：トマスの説明でも何らかの知の欠如が無抑制を構成する重要なモメントのひとつとなっていることは間違いない。実践的な知と呼べるものは、具体的・個別的なものであっても、そう簡単には欠落したり潜在化したりするものではないし、それがそこにあるなら正しい行為を導くのでなければならぬという基本的な確信は、トマスがソクラテスと共有するものである。トマスの無抑制論は、ソクラテスの主張を基本的には認めながらも、無抑制と呼ばれる現象の構造をさらに丁寧に考察することによって、そこでの諸能力のはたらきや欠落を説明しようとするものであった。(2)意志と責任：トマスにあってアリストテレスにはない重要な概念のひとつは、意志（*voluntas*）である。しかし論者は、トマスの倫理思想において意志をあまりに強調する読み方は適切ではないとする。むしろ理性と意志の結びつきや相互作用、共同作業という点がトマスの無抑制論（と倫理思想一般）を理解するための重要な鍵のひとつであると強調する。(3)道徳的弱さを語る文脈：トマスの無抑制論を考える場合にも、「トマスの総合」ということがひとつの問題である。しかし、少なくとも「無抑制」の議論に関してはアリストテレスの影響は決定的である。その文脈でトマスがおこなう議論は「行為の理論」と呼べるような視点と関心を中心におこなわれているが、この議論を整理し、その特徴と限界を見きわめることがまずは不可欠であり、この課題に関しては本論文である程度の達成をみた。さらにトマスの議論を追っていくと、第V章で考察の方向性を示したように、「徳の理論」を徹底的に再検討することが必要であるという課題を提示して、論者は本論文を締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は西欧中世盛期スコラ学における最大の哲学者であるトマス・アクィナスにおいて、「無抑制（*incontinentia*）」と呼ばれる概念がいかなるものであるのかを主題としている。この概念は「なすべきではないと知っているのに行ってしまふ」というわれわれが日常的に経験する事態を表すものであるにもかかわらず、哲学的に厳密に規定することには大きな困難があるものとみなされてきた。論者はこの錯綜した問題がアクィナスにおいてどのように解明されているのかを、詳細で広範なテキストの渉猟・分析を通じて明らかにしようとしている。この主題に限定した論考としてはわが国において他に例を見ないものであり、以下に挙げるような優れた独創的な成果を含んでいる。

(1)「無抑制」という事態が含む哲学上の問題性は、人間の行為の本性と構造とを全体としてどのように理解するかという困難と分かちがたく結びついている。そのために論者は無抑制という事態を、理性、意志、感覚的欲求の三者の関係、行為にいたる心的作用の構造、徳の理論といったアクィナスの倫理学の原理的洞察を総合的に考察することによって捉えようと

した。論者の到達した基本的解釈は、アキナスの無抑制を理解するにも、主意主義／主知主義、アリストテレス的／アウグスティヌス的といった単純な視座では不十分であり、さまざまな論点を複合的観点から捉えることが不可欠であり、そのことが無抑制というそれ自体輻輳的な事態の解明にも資する、というものである。この解釈を論者は周到な分析を通じて提示しており、アキナスの無抑制論理解に基本的視座を与えることに成功している。

(2)とりわけ、第V章「意志の弱さはいかにして可能か」において、「無抑制」を論じる際にこれまで注目され言及されることのなかった「無思慮 (*imprudencia*)」という悪徳との関係にまで視野を拡大したことは、本論文の特筆すべき独創性である。すなわち、アキナスの無抑制論はこれまで、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第7巻の「アクラシア」論をほとんど唯一の下敷きにして理解されてきた。事実アキナスが主題的に無抑制を論じている箇所では、アリストテレスの提示した概念と理論の枠組みが承認されていることを論者も承認する。しかし、そこに議論をとどめている限りわれわれの経験する「なすべきでない」と知っていながらなしてしまう」という事態の説明としては不十分であると認定し、その上でアキナスにおいては、そのような事態の説明が狭義のテクニカルな概念としての「無抑制」とは差し当たり別の「無思慮」という文脈の中で論じられ解明されていることを論者が指摘し分析したことは、本論文が提示した最大の貢献であるといえるものである。

(3)さらには、第三章「実践的推論モデルによる無抑制の説明」はその副題「トマスはアリストテレスをどう読んだか」が示しているように、アキナスの無抑制の理論をその初期の著作『命題集注解』から晩年の『神学大全』まで、実践的三段論法による無抑制の説明のモデルを通時的に整理し、そのアリストテレス理解の明晰化と深化の過程をきわめて明瞭に描き出していることは哲学史研究として特筆に値する。また、第四章でなされる「放埒」概念との対比による無抑制の分析は、従来の無抑制にかかわるアキナス研究において十分に注目されてこなかった視点であるとともに、そこでなされる「選択によって罪を犯す／選択しながら罪を犯す」の対比の解釈を通じたアキナスの哲学的立場の明確な叙述も、論者の優れた分析能力を示すものである。

以上のように、本論文はその明快な記述をも含めて、トマス・アキナスの無抑制論に関する卓越した論考であると評価できるものであるが、他方で残された課題がないわけではない。ひとつには、上述のように、アキナスの無抑制理解、さらには倫理学の全体において、理性と意志の、あるいは知性的部分と感性的部分の対立ではなく、そのような諸能力の間の調和的はたらきと全体性が強調されているが、そのような主張のためには心身関係を含めた人間についての存在論的・形而上学的基礎づけが不可欠であると考えられ、その観点からは十分な吟味が行われていないことが惜まれる。もうひとつには、無抑制を徳論（主として「思慮」）との関係において捉える必要があるという重要な指摘をしながらも、論者自身が述べているように、その十分な探求は今後の課題として残されている。さらには、無抑制という現象についての現代の活発な議論との対話という面も十分ではなく、さらなる課題と言えるであろう。以上の諸点は論者の今後の研究の進展を待たねばならないが、本論文はそのさらなる追究のための基盤として十分な内容を備えるものであると認定できるものであり、論者の高い研究能力をもってすればその追究が大きな成果をあげるであろうことを疑うことはできない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として、十分価値のあるものと認められる。2002年2月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。